講話

幼児の心理

—1—

お茶の水女子大学教授
波多野完治

第一講 乳児から幼児へ

乳児期とは何か

心理学的に幼児期というのは、生後一ヵ年を経過したころから、六七歳ころまでの期間である。このうち一歳から三歳ごろまでを**幼児前期**、三歳から六七歳ころまでを**幼児後期**といつていたが、最近ではこれを**第一児童期**、**第二児童期**といつて、区別するやり方が現れている。これは小学時代を**第三児童期**とするので、このやり方では子供の時代が三つにわかれることになる。

さて、乳児から幼児にうつる際に三つの大きな事件がおこる。これによつて乳児の心の世界と、幼児の心の世界とが完全にちがつたものとなるのである。その三つの事件とは

(1) 離乳

(2) 直立及歩行

(3) 言葉

の成立である。

この三つの事件はいずれも、そのものは子供の**有機的欲望**に関連している。つまり子供の身体の変化、発達が上の三つをひきおこすのであつて、この有機的欲望が中心になつているという点では、幼児期も乳児期の延長だ、といわれないこともない。しかし、幼児期は乳児期とちがつて、有機的欲望の種類がちがつてくる。即ち「食物」への欲望が第二次的重要性しかもたなくなり「運動」への欲望が第一の大切なものとして感ぜられてくるのである。

幼児期のはじめは、まだ食物は親たちの手によつて規則的に子供にもたらされるが、しかし、これは子供にとつての唯一の関心事ではなくなつてしまう。そして自分の筋肉をうごかし、自分の感覚器官をはたらかせることが子供の第一の仕事になるのである。この

ような運動と感覚とは、他人のやるのをみているのでは満足されない。赤ん坊のころには、大人のやることをみていたのしんでいるが――そうして何遍も何遍も同じことをやつてくれ、といつて要求するが、幼児になると、これを自分でやつてみようとするのである。

このようなことのおこつて来る原因は何だろうか。

感覚と運動

第一には身体的エネルギーの増加をあげなければならない。赤ん坊のころとちがつて、幼児は、力もつよくなつている。元気もあらわれてきている。それは手足の自由な使用によつてのみ解消されることができるのである。

第二は神経系統の成熟である。大脳の組織は生れてから出来ていくものであるが、それが一定の段階に達し、手足の神経とうまく連絡するようになつてくるのである。

第三は第一及第二の結果として運動機構の間の協動作業がうまく行くようになつてくることがあげられる。赤ん坊の時代には手は手、足は足と動くばかりでなく、右手と左手、右足と左足との協動作業さえ出来なくて、おたがいにバラバラであつた。幼児になるとこれらが相当に連絡してつかえるようになり、こうして運動の可能性が著しくのびて発達してくるのである。

さて、このような原因にもとずくので、運動の欲望、運動への興味は一方から考えれば「必然的」なものであるが、又他方から考えると、そのことはこれによつて子供が一層の運動を発達させ、一層いろいろな行為をやるための「練習」になつている。子供が自分で行為のための運動の協力をつくり出すための基礎が、これによつて得られるのである。

ワロンはいつている。

感覚運動的活動は同時に、他方から考えると外界に対するはたらきかけになつているものであるが、これは二つの異つた方向に発展するものである。但しこの二つの方向は相互に補足しあうものでもある。その二つの方向とは

一つは自動運動の方向、あるいは一層正確にいえば特殊化された自動運動。

他は新しい運動の創出、即ち新しい状況に対面したときに、今まで自分のもつていなかつた運動様式をつくり出すこと、これである。

子供が自然に感覚運動的活動をやる。自分の自然発生的な欲望、興味にかられていろいろな運動をやる。それは一方では自動運動、即ち習慣や目的をしつかり固定し、容易にするのに助けになると共に、他方ではその容易になり、固定した運動をむすびつけ、連絡して新しい運動様式をつくり出すことを可能にするのである。

歩きはじめ

このようなことは歩行や直立の場合に特によく観察される。

子供は「立たなければならない」とおもつて立ち上るのではない。彼等は神経及筋肉の成熟にいきおいずけられて自然に立ち上るのであり、立ちあがるのが面白いから立ち上るのである。だから直立は子供においては目的があつてやるのではなく、即ち「何かをとろう」などとおもつて立ちあがるのではなく、あそびとしてやるのである。立ち上ることにいろいろな「快感」がついているのである。

歩行についても同様である。

幼児のおもちやの心理學的意味

生後一ヵ年のおわりごろから、すでに子供は感覚心像にもいろいろな種類のあること、それらは世界の中で、子供自身との関係において、はたらきの相違をもつていることなどに気ずきはじめる。たとえば、オモチヤと、そのオモチヤについているヒモ、とは違う。オモチヤはさわれば音がするし（ガラガラ）見ればきれいだ（クスダマ）しかし、ガラガラについているヒモはそれはとはちがい、自分とガラガラとをむすびつける仕事をするものである。ヒモをひつぱればガラガラがついてくる。ヒモそのものは音はしない等々。

棒、オモチヤその他のものをのせる台などは、オモチヤやたべものそのものとはちがうものである。こういう区別が子供に出来るようになつている。

但し注意しておかなければならないのは、このような感覚的事物の相違の認識は、あくまでも「行為」である、ということである。ガラガラとはふれば音をたてるものであり、ヒモは引けばガラガラがついてくるものである。

即ちヒモの認識とは、小さい子供にとつては引つぱること以外ではない。ガラガラとは振ることを意味するのである。

音を立てようとおもつて「振る」という意図的行為、又はガラガラを手もとにひきよせようおもつてヒモをたぐる意図的実践が、子供の「認識」の第一の段階なのである。

この意図的行為はだんだんと

(1) 図式的になり、即ちこまかいところがとり去られて、本質的なものだけが裸のまま露出されてくる。

(2) 非実践化してくる。即ち実際の行為であることをやめて、考えただけ、思つただけのものになつてくる。このように心像化したものが、幼児の「認識」の特徴といえる。これが言葉とむすびついて、概念化すると、大人の意味での「認識」になるわけだが、そこまでいくには子供はまだ長い道をへなければならない。

「第一の段階は生後一ヵ年までで、純粋機能の段階である。この段階で

は赤ん坊はなんでもさわりなんでもいじる。生後一ヵ年から、そのさわり方、いじり方に相違が出てくる。ヒモは引つぱり、ガラガラは振るというように、対象の相違によつて、運動機能の方にも分化がおこる。第三の段階として、生後二ヵ年のおわりごろから、子供は自分の運動によつて「作品」をつくることができるのだ、ということを知つてくる。犬や、トリや、などをかいたり、つくつたりすることができるという自覚である。さて、このような対象認識の段階的発達には、それと平行的に社会的（心局心理学的）関係の発達が対応する。即ち——

第一の段階は全然未分化の社会的接触でどんな人にもおなじように対する。人によつて態度がかわるということはない。

第二の段階は区別され分化した社会的接触の段階で人によつて態度をかえる。いわゆる人みしりである。

第三の段階は子供の場合、ともだちをつくる、したり形になつてあらわれる。自分がはたらきかけることによつて社会関係をつくり出したり又それを変えたりするというのが「作品」意識の成立に対応する社会的態度である。

（シャーロッテ・ビューラー・ラカシュの紹介による）。

言語の發生の心理

さて、言語の発生と発展にうつる。今ビューラーの説の紹介でも一寸ふれたが、運動機能と言語機能との間には平行関係がある。運動機能の発達は外界の物と子供との関係を成長させるために必要なものであつたが、これに反して言語は人と子供との関係、即ち社会生活の発達をうながすのに必要なものである。又運動機能は子供の成長にともなつて必然的におこつてくるもので、その必然的の欲求にもとずいて子供がこれを自然発生的につかつているうちに（開発させているうちに）外界の認知も出来、又それにともなう「あそび」が生れてくるのであつたが言語もやはりそうである。

歩行の発達によつて子供は一つの事物に対してその周囲をまわり、これをいろいろの方面からながめたり、さわつたりすることができるようになる。それと同様に、子供は言語を発達させることによつて人をいろいろにうごかし、人にいろいろな運動をおこさせることができるようになるのである。

お母さん！

そうすると、お母さんがかけてくる

お父さん！

今度はお母さんではなく男の人だ。

こんな風に「単語」は歩行と同じような事物の変化を彼のまわりにもたらす。

このことによつて、子供は自分が世界の中心だ、というような印象をあたえられてしまい、又、一旦あたえられ

ると、それがつよめられてしまう。

今まで赤ん坊の時代には子供の外界との関係は、外界を「絵」又はゲシタルトの連続としてつかむのが特色であつた。今では子供は全てのものを個別的につかむか、但しそれを自分との関係においてのみつかむのである。

ルネ・ユベールには、幼児初期の欲望又は興味の特性を「運動知覚的」及運動言語的興味、という言葉でいいあらわしている。彼等の興味は運動の方にむかい、それを満足させるための快感が、子供の関心の中心である。それは時として感性ばかりでなく、感能の満足の欲求にさえもいたる。

で、この感能満足は、はじめは未分化な「幸福感」又は「不満感」（不服感）という感じになつて、子供の心に反映するが、それがだんだん分化してくると、快、不快、愛、憎、等の基本的感情の形になつて、はつきりしてくるわけである。

原因と結果のはたらき

このような感情の分化が進行するについて、非常に大切なことが一つある。それは「循環」又は「原因結果」の交替ということである。一般に人間の精神は原因がいつも原因でいるというようなものではなく、原因が結果になつたり、又結果が原因になつたりして――これを弁証法というのだが――だんだん発達をとげていくのであるがその精神的弁証法の根本法則が、この感情分化の際にも自己を現出するのである。

子供がごく小さいとき、子供は感覚と感情との区別もない。それは漠然たる「感じ」であつて、これをワロンは未分化の感情性 affectivité diffuse という言葉でいいあらわしている。

ところが、子供がだんだん精神的に覚醒してくると、この有機的な感じの中に分化が起つてくる。その分化は、身体の外でおこつていることと、身体の中でおこつていること、との区別を最初とするので、前者を外受性(exteroceptive) と内受性 (interoceptive) という術語であらわす人もある。ところで、この内受感性の方はいつまでも有機的全体的未分化の性質をもつているが、外受感情の方は赤ん坊の経験がだんだんすすむにしたがつてまず第一に「柄地分節」という分化がおこつてくる。これは牛乳ビンとか、ガラガラとか、クスダマとかいうものが、全体の場面の中からうかび上つて、牛乳ビンの場合ならば空腹の中からそれをみたしてくれる物という風に意識され、クスダマならば天井の地づらの上にたれさがつた美しい「柄」という風に意識されるのである。

さ、て牛乳ビンやクスダマは子供にとつて「満足」のものであるが、それは全体の地ずらと関係しているので、

子供は牛乳ビンや、クスダマの快感を得るために、全体場面をつくり出すという行為をすることになる。なぜならこの全体場面の中には自分も入つているので、子供のバク然たる感じの中で今うごかしうる要素は子供の身体だけだ、ということは——子供自身はまだ意識していないのだが——事実としてうごかしがたいものだからである。

子供はかくて、牛乳ビンやクスダマのある場面をつくり出すために、漠然たる衝動にかられて、自己をうごかすことになる。

この自己の運動が効果がある。——母親がビンをもつてきたり、クスダマの見える場所に、子供をつれていく。この結果、子供は満足する。

この過程を図式にして示すと

欲望——運動——快感

という形になる。

子供はこの次には、この最後の結果たる快感を得るために（欲望）又運動をすることになる。これが循環運動といわれるもので、子供はいつも一つ行為をくりかえしてうむところがない。

この循環運動は今から五十年以前、アメリカのボールドウインによつてすでに非常に重要視されていたものであるが、最近スキスのピアジエの研究によつて更に大きな意味を得ることになつた。

このような循環運動は

原　因——結　果——原　因

（欲望）——運　動——（快感）

という風に進行するので、いうまでもなく弁証法的運動であるが、これが更に進むと中間の運動そのものが更に分化する。即ち運動が自己の運動ばかりでなく、物をうごかすとか、物をうごかすことによつて音を出させる（ガラガラの場合）とかいう風に中間の運動がだんだん複雑になつていくのである。

ここで、児童心理学にとつての大きな問題がおこつてくる。それは、このような循環運動の本質は何だろうか、ということである。

二つの説がこれに対して提出されてくる。

一つはこれは経験又は練習だという説である。子供はこのようなくりかえしの行為によつて物事の区別をしり分化させ、だんだんと行為そのものの発達をうながすのである。

もう一つの説は、これを「知性」（知能）とみるものである。これはピアジエが、となえ出したものであるが、今みるように、循環運動は結局、中間的行為の創出をやつている。欲望と快感との間に運動を介入させ、又、運動自体の中にも物を介入させる。ところでこのような中間的機構の創出は知能の本質なのである。たとえば道具というものは、なにか目的があつて、そのための中間として、道具をつかうのであるから、これは知能の産物であるが、循環運動はまさにこのような行為の初期の段階ではないかというのである。

この議論の決着については後に機会があつたらくわしくのべるがとも角このような循環運動の結果として二つの現象がおこつてくる。

第一は、これによつて、子供は物にもいろいろなものがあること、又場面にもたくさんの種類があることを知つてくることである。これを感覚の多様化といつてよい。勿論これによつて自分自身も変化するので、その方の認知も分化する。感覚のたのしみがかくして得られる。

もう一つは、この結果、物ごとを自己の意のままにうごかした、という気持からくる快感である。欲望が満足されたという、そのことに満足を感ずること、又そういう満足を感じたいという欲望が発生する。

第二の方は、欲望の満足そのことではない。欲望の満足にともなう、自己の満足とでもいうものである。これをある人は感能の分化といつている。

この第二の方の満足は、後に自己意識に発展するものなので、非常に大切な欲望であり、又、行為なのであるが、従来このようなものをみとめなかつた。これを発見したのはフランスの心理学者ワロンの効績であるが、ワロンの後にもシャトーという人が子供のあそびを研究して同じような結論を出している。彼によると、子供はこの感能の満足をうるために、感覚的にはくるしいことをもしようとするものだというのである。

ユビでつくつたオユに入るあそび、などは感覚的ないたさにもかかわらず感能的な満足のある場合であるといえよう。

そこで、シャトーはあそびと「快感」とを区別している。たとえばオカシをたべる快感はあそびにはならない。だが又一方からいえば、快楽のともなわないあそびもない。

この矛盾をはつきりさせるには、快感に二つを区別して、オカシをたべる快感（感覚）と、オカシで満足したことの快感（感能）とを分ける外はない。そうして、この感能的要素がたやすく満足出来る点に、あそびの本質をみとめるより外はない。

ジャネーがあそびを規定して、高度の非現実の中で、たやすく成功の感を得るための行為といつているのは、大人の場合としては適当なものであるが、ごく小さい子供のあそびにはこれが未分化の形であらわれはじめているのである。

自我が否定されるようなところにはあそびは成立しない。この意味でも、あそびと子供の自我成立との間には密接な関係のあることがわかる。

（つづく）